

〔資料〕

## 下野国薬師寺別院 龍興寺蔵『龍興寺戒壇縁起』 翻刻と解題

関口 静雄・松本 麻美

### 【解題】

栃木県下野市薬師寺に所在する真言宗智山派の生雲山龍興寺が伝蔵する『龍興寺戒壇縁起』『慈猛上人行状記』および『龍興寺縁起略記』を翻刻紹介する。

龍興寺は下野国薬師寺の別院と伝え、境内に、日本に戒律を伝え、天平宝字五年（七六一）に聖武天皇の勅願によって本朝三戒壇の一つである戒壇院を下野国薬師寺に建立したという唐僧鑑真的供養塔や、孝謙天皇に寵愛され、宇佐八幡神託事件によって天皇没後の宝龜元年（七七〇）八月に造下野薬師寺別当職に左遷され、宝龜三年（七七二）年四月七日失意のままこの地で没し、庶人として葬られたという弓削道鏡の墓と伝える円墳があることでも知られる。『龍興寺縁起略記』によれば、龍興寺の名は、鑑真が住持した唐揚州の龍興寺に由来するという。

下野国薬師寺は『東大寺要録』に天智天皇九年（六七〇）、『伊呂波字類抄』に天武天皇二年（六七三）、医王山安国寺所蔵の晃栄撰『薬師寺縁起』および貫翁撰『薬師寺縁起』に天武天皇八年（六七九）、『帝王編年記』に大宝三年（七〇三）の創建と伝えられるが、いずれも文献的・考古学的に決定的な証左がなく、一般には、七世紀末にこの地方を治めていた豪族の下毛野朝臣古麻呂によって創建されたとする説明が共通理解になっている。

『続日本紀』によると、古麻呂は和銅二年（七〇九）一月二十八日に式部卿大將軍正四位下の官位で没していて、天武天皇・持統天皇に仕え、藤原不比等の信任を得て、大宝律令の制定にも関わるなど中央政權とのつながりも深く、したがって下野国薬師寺も東国における仏教施策の一翼を担う重要寺院として位置づけられていたと考えられている。じつ近年の発掘調査によっても、七世紀末の天武朝の創建であると推定され、一塔三堂形式の伽藍配置で、外郭施設（板塀）の規模が東西約二五〇呎、南北約三五〇呎、瓦葺回廊の規模は東西約一一〇呎、南北約一〇二呎にも及ぶ大寺であったことが明らかになっている<sup>注1</sup>。

下野国薬師寺の流れを汲む医王山安国寺所蔵の晃栄撰『薬師寺縁起』・貫翁撰『薬師寺縁起』、また龍興寺所蔵の『龍興寺戒壇縁起』・『龍興寺縁起略記』は、いずれも天武天皇がその後持統天皇の病氣平癒を願い、勅願によって天武天皇白鳳八年（六八〇）に奈良薬師寺の祚蓮上人が建立したのが下野国薬師寺であると伝えている。ここに天平宝字五年（七六一）、聖武天皇の勅願によって本朝三戒壇の一つである戒壇院が築かれ、下野国薬師寺は隆盛を誇るようになる。

そもそも鑑真が四分律による正式で厳重な受戒制度を伝えるまで、わが国には正式に僧侶と言える存在はなかった。だから、国内に仏教が流布し隆盛するにともなって、生活苦や税を逃れるために自度して僧を名乗る者

が増え、また僧としての戒律を守る者が少なくなったといっても、それは当然のことであった。正式な僧侶と認められるためには、受戒の儀式を執行する戒壇において、三師七証による厳重な戒の伝授が必須であった。従って、鑑真によって戒律がもたらされるまで、わが国の僧界はそれを知らなかったのである。

天平勝宝六年（七五四）、聖武上皇は光明皇太后らとともに唐から渡来した鑑真から大仏殿前に築かれた戒壇で戒を授かり、翌七年、日本で初めて正式な授戒の場として戒壇院を建立した。これを契機として朝廷は仏教界に蔓延する弊風を一掃するために戒壇受戒の制度を採り入れ、天平宝字五年（七六二）に筑紫の観世音寺と下野の薬師寺に戒壇を設置して僧界の統制を図った。いわゆる本朝三戒壇である。正式な僧侶となるには、そのいずれかの戒壇で受戒し、その証明書である度牒を受けねばならなかったのである。東海道の足柄峠、東山道の碓氷峠より関東・東北の僧に戒を授けることができた下野国薬師寺は、おのずとわが国屈指の大寺院として隆盛を極めた。

しかし、下野国薬師寺は九世紀中頃に大火災に遭難して伽藍の中心部が焼失し、また国家仏教の衰退とともに天台宗などの新宗派が興り、比叡山にも戒壇設置が認められて独自に授受戒が行われるようになると、これまでの三戒壇の意義と機能も失われ、『元亨釈書』（巻二十七「度受志二」）に「及睿壇興野壇衰」とあるように、ことに下野国薬師寺は急速に衰退していった。

衰亡の極みにあった下野国薬師寺を復興したのは慈猛上人である。上人は比叡山で出家し、高野で瑜伽密教、醍醐で三宝院流を学んだ人で、弘長二年（一二六二）薬師寺戒壇院に移住し、以来十余年、東国諸山から修学僧が群参したと伝え、武蔵国金沢の称名寺の開山に招かれた審海など多くの弟子を養成し、薬師寺の復興に努めた。称揚されてしかるべき行業を残したはずの人であるが、伝えられる史料が乏しいのが惜しまれる。

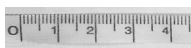
慈猛上人によって一応の復興がなされたのであるが、しかしまた足利尊氏が戦死者の菩提を弔うために、国ごとに安国寺を置き、利生塔の建立を発願したことから、暦応二年（一三三九）に下野国薬師寺は安国寺と改称され、ここを下野国薬師寺の名は失われた。さらに戦国動乱の時代、元龜元年（一五七〇）十一月、小田原北条氏と結城多賀谷氏との戦乱で安国寺も龍興寺とともに焼け落ち、貴重な什宝や記録も悉く失われてしまった。しかし、安国寺と龍興寺は今日まで法脈を伝え、往時に比すべくもないが、それでも貴重な文物を大切に伝えている。

ここに翻刻紹介する龍興寺蔵『龍興寺戒壇縁起』『慈猛上人行状記』『龍興寺縁起略記』はいずれも江戸時代に撰述された文書であるが、元龜の戦乱で失われた寺史の欠を補おうとする必死の努力を窺うことができる。現今においては、安国寺は下野国薬師寺の法脈を受け継ぎ、戒壇を守護する寺であり、薬師寺の別院であった龍興寺は鑑真の供養塔や弓削道鏡の墓を護る墓寺として一般に認識されているようである。しかし戦乱以降、安国寺と龍興寺は戒壇の所有をめぐって確執を繰り返してきた。この確執の経緯について、これを正面から取り上げた研究はこれまでまったくなかった。『龍興寺戒壇縁起』の全文が紹介されたことさえなかった。このたび龍興寺住職・近藤純雄師の厚意溢れる御理解を頂戴し、龍興寺所蔵文書を翻刻紹介する次第である。近藤師はじめ一山の方々に篤く御礼感謝申し上げる。

注1 南河内町教育委員会編『ビジュアル下野薬師寺』平成十四年三月。

注2 同右。

注3 龍興寺に道鏡が使用したという円印が伝わる。五〇年ほど前までは「山川草木」の文字がはっきり読み取れたという。

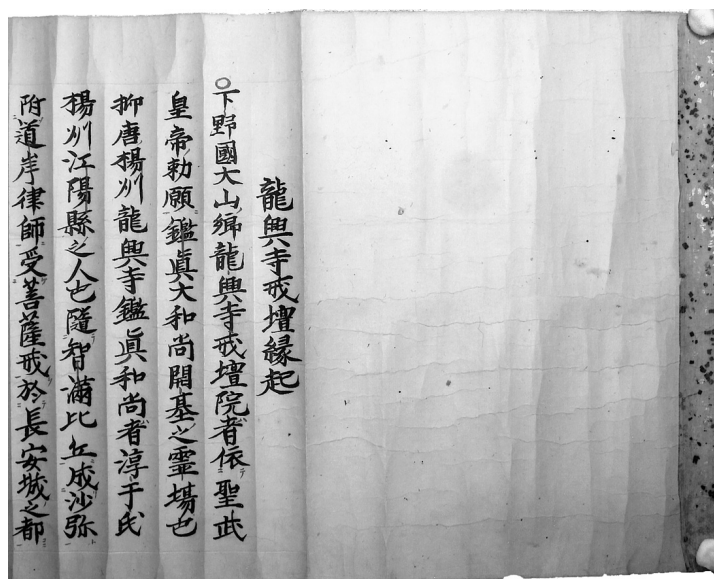


龍興寺蔵 伝・道鏡円印

【書誌】

☆『龍興寺戒壇縁起』『慈猛上人行状記』は一卷の卷子本に記された書写本である。「龍興寺戒壇縁起 一卷」と記された杉箱に収められている。青緑色の絹表紙で、見返に金箔が装飾され、鳥の子紙の本文料紙には縦・横の押界が施されている。縦約三〇糎、総長約五米七四糎、長短揃いの八紙から成る。漢文の本文には、朱をもって送仮名・返点・合符などの書き入れが多くある。

☆『龍興寺縁起略記』は料紙に楮紙を用いた袋綴装三丁の紙縫綴本である。縦約二四糎、横約一六糎。その見消の様子などから草稿本と思われる。



【凡例】

- 一、上段に写真影印を置き、下段に翻刻文を示した。
- 一、行取・誤字・宛字等はそのまに翻刻し、後補字は本文に入れた。
- 一、卷子本は行頭に数字で行数を示し、袋綴本は丁数を各丁行末に記した。
- 一、影印を付したので、朱書は全て省略し、見消は翻刻文に反映した。
- 一、漢字・仮名とも原文の字体と表記を尊重して翻刻した。
- 一、句読点を私に施した。

【翻刻Ⅰ】

001 龍興寺戒壇縁起

下野國大山郷龍興寺戒壇院<sup>ハ</sup>者、依<sup>テ</sup>聖武皇帝<sup>ノ</sup>勅願<sup>ニ</sup>、鑑眞大和尚開基<sup>ノ</sup>之靈場也。

抑唐揚州龍興寺鑑眞和尚<sup>ハ</sup>者淳于氏、

005 揚州江陽縣<sup>ノ</sup>之人也。隨<sup>テ</sup>智滿比丘<sup>ニ</sup>成<sup>リ</sup>沙弥<sup>ト</sup>、  
附<sup>シテ</sup>道岸律師<sup>ニ</sup>受<sup>ケ</sup>菩薩戒<sup>ヲ</sup>、於<sup>テ</sup>長安城<sup>ノ</sup>之都<sup>ニ</sup>



究三藏教法時吾朝。聖武皇帝天平勝  
寶五癸巳年普照榮叡之二師遣唐大  
使清川宰相等入唐。玄宗皇帝  
天平十二年是時和尚  
楊昶於大明寺開律講普榮二師望席  
作禮語曰佛法東流教授之人乏吾聖德  
太子曰我滅後二百年異域有興真教人  
今當其期願東遊頻勸東漸真曰我聞  
南嶽大師惠思生和國弘佛法彼土機緣  
熟我豈辭勞勛哉和尚快然許諾具足  
法進如意如寶思訖惠雲道興詳  
彦及榮叡普照等門弟八十餘人並  
持佛像佛舍利戒壇圖經戒壇之土蓋  
子天台止觀等之諸經論來一葉之風帆  
踰千里之烟波天平勝寶六甲午載正月  
來朝同年四月金於大佛殿前築戒壇興  
毘尼之正法始如法之受戒同七年戒壇院  
成世稱東大寺戒壇是也。天皇皇后太  
子公卿同受者四百三十餘人也天平寶字  
二戊戌載南都建招提寺同年八月朔日  
鑑真賜大和尚勅号重而詔大和尚東西  
二邊築戒壇關東下野國竜興寺  
鎮西築前國觀世音寺也所謂三戒  
壇是也諦是中國之貴賤東西兩州之群  
類濟度之尸羅波羅密場也。夫當寺之  
戒壇者天平寶字四庚子年八月十三日鑑

究三藏教法。時吾朝聖武皇帝天平勝

寶五癸巳年、普照・榮叡ノ之二師、遣唐大

使清川ノ宰相等ト入唐ス。玄宗皇帝  
天平十二年是ノ時和尚

010 楊昶於大明寺開律講、普・榮ノ二師望席ニ

作禮語曰、佛法東流シテ教授ノ人乏シ。吾聖德

太子ノ曰ク、我滅後二百年ニ、異域有下ラシ興真教一人上。

今當其期ニ。願クハ東遊シ玉ヘト。頻リニ勸ム東漸ヲ。真曰ハク、我レ聞ク、

南嶽大師惠思生ニシテ和國ニ弘ム佛法ヲ。彼ノ土機緣

015 熟。我レ豈ニ辭ニ勞勛ニ哉。和尚快然トシテ許諾シ玉フ。具ニ足

法進・如意・如寶・思訖・惠雲・道興・詳

彦及榮叡・普照等ノ門弟八十餘人ト並ニ

持ニシテ佛像・佛舍利・戒壇圖經・戒壇之土・菩提

子・天台止觀等ノ之諸經論ヲ、乘ニシテ一葉之風帆ニ、

020 踰千里ノ之烟波ヲ。天平勝寶六甲午載正月、

來朝。同年四月入京ニ。於テ大佛殿前ニ築ニ戒壇、興ニ

毘尼之正法ヲ、始行ニ如法ノ之受戒ヲ。同七年、戒壇院

成リ。世ニ稱ス東大寺戒壇ト是レ也。天皇・皇后・太

子・公卿、同ク受ル者四百三十餘人也。天平寶字

025 二戊戌載、南都ニ建ニ招提寺ヲ。同年八月朔日、

鑑真ヘ賜ハル大和尚ノ勅号ヲ。重テ詔ニシテ大和尚ニ東西

二邊ニ築ニシメ戒壇ヲ關東下野國竜興寺  
鎮西築前國觀世音寺也。所謂ニ三戒

壇是レ也。諦ニ是中國ノ之貴賤東西兩州ノ之群

類濟度ノ之尸羅波羅密場也。夫レ當寺ノ之

030 戒壇者、天平寶字四庚子年八月十三日、鑑

眞大和尚供奉之僧者如意惠雲等下向東國到此大山鄉。  
著彼藥師寺蓋聞。天武天皇白鳳八己卯  
給依勅願釈祚蓮開榮師寺也。寺号  
此里爲物号爲伽藍勝地故於此寺開  
祖大和尚移唐龍興寺舍那殿壇法改別号  
名竜興寺戒壇院是即榮師寺或壇也竊以戒德  
者利群生以律業者授萬機則者榮得佛  
法興隆防非止惡之功能此時諦盛也官設  
院宇巍々宛如東大寺鑑眞和尚者雖戒律堅固明  
選地建戒壇院築以天然天道場之土大唐西明寺之世  
稱藥師寺戒壇者彼因物号竜興寺者榮師寺之別院而即  
先藥師寺之衆僧登壇受戒次  
當國之士農數百人受戒同年十一月戒壇院  
造畢同十二月十三日戒壇院供養本尊安  
置釋迦如來紫磨金之尊容也多寶佛赤梅檀之尊容也至若所  
將來之法具僧物等悉無不異域之靈宝  
而已同天平寶字五年正月廿一日有勅  
使中納言高房卿依東大寺之佳例也始賜勅願戒壇院之額則名  
龍興寺戒壇院山号名生雲山竜興寺而生雲之謂也依古語之謂也  
依廢帝皇勅天平寶字六壬寅載當國於  
大山庄五千畝之莊田試六尺日步々四百日試秦二百四十步日試被寄  
當寺令成永法務之領知也又大和尚勸化  
諸弟始講筵勤行奉三寶回向神明法  
樂年之正月置轉讀般若會爲奉祈聖

- 眞大和尚供奉之僧者如意惠雲等也。下向東國到此大山郷。  
著彼藥師寺。蓋聞、天武天皇白鳳八己卯  
稔、依勅願釈祚蓮開榮師寺也。以寺号  
此里爲物号。爲伽藍勝地故、於此寺開  
035 祖大和尚移唐龍興寺舍那殿壇法、改別号  
名竜興寺戒壇院。是即榮師寺或壇也竊以戒德  
者利群生、以律業者授萬機。則者榮得佛  
法興隆・防非止惡之功能、此時諦盛也。宣哉、  
院宇巍々宛如東大寺。鑑眞和尚者雖戒律堅固明  
040 選地建戒壇院。築以天然天道場之土・大唐西明寺之世  
稱藥師寺戒壇者、彼因物号。竜興寺者榮師寺之別院而即  
戒壇院也。先藥師寺之衆僧登壇受戒。次  
當國之士農數百人受戒。同年十一月、戒壇院  
造畢、同十二月十三日、戒壇院供養。本尊安  
045 置釋迦如來紫磨金之尊容也・多寶佛赤梅檀之尊容也。至若所  
將來之法具・僧物等悉無不異域之靈宝  
而已。同天平寶字五年正月廿一日、有勅  
使。中納言高房卿依東大寺之佳例也始賜勅願戒壇院之額。則名  
龍興寺戒壇院。山号名生雲山。竜興寺而生雲之謂也依古語之謂也  
050 依廢帝皇勅、天平寶字六壬寅載、當國於  
大山庄五千畝之莊田試六尺日步々四百日試秦二百四十步日試被寄  
當寺。令成永法務之領知也。又大和尚勸化  
諸弟始講筵勤行、奉三寶回向、神明法  
樂。年之正月置轉讀般若會、爲奉祈聖

朝安穩・國家豐饒也。卯月下旬結安居、  
 笑名報恩會。文月上旬修佛眼會、令祈  
 令法久住。又儲法華最勝王二經法會篇  
 志。現世安穩後生善處、萬靈解脫所謂  
 呼噫聽戒德高四方造塋無不備足。然而  
 當國室八嶋有若田氏藤系宇與寺  
 信德人依在出塵之志、入伊豆留山巖窟  
 奉拜觀音尊容有感靈夢。又聞鑑真  
 明德來龍興寺拜戒壇及見番々將  
 士蠡々農圃登壇受戒、而藤系抑感  
 淚請受戒。大和尚曰、奇哉。今親見興  
 寺大德。同年二月、藤系薙髮齡二受  
 沙弥十戒。七十二威儀、名嚴朝後改號勝  
 道聖人。終隨律儀受具足戒、通曉法  
 華經・金光明經・唯識論・天台止觀等  
 數部經論。敬師鑑真大和尚、和友如意  
 惠雲等。同癸卯季五月五日、鑑真大  
 和尚入滅壽七十七歲。門弟卒哭涕泣而常有  
 怵惕之心。如意勝道惠雲等同志而  
 廟前建碑植菩提樹。同季七月、從南都  
 思詔律師投書於龍興寺、欲東征傳  
 編集之旨趣也。答以草書一卷當寺之  
日記也。同  
 年九月二十五日、於當寺境內吉田池勸  
 諸輪蓋龍王戒壇守護  
之竜神也。天平神護元巳

055 朝安穩・國家豐饒也。卯月下旬結安居、

夏、名報恩會。文月上旬修佛眼會、令祈  
 令法久住。又儲法華最勝王二經法會、爲

二志。現世安穩・後生善處・萬靈解脫所謂也。

呼噫聽戒德高四方、造塋無不備足。然而

060 當國室八嶋有若田氏藤系宇興寺

信德人。依在出塵之志、入伊豆留山巖窟、

奉拜觀音尊容有感靈夢。又聞鑑真

明德、來龍興寺拜戒壇、及見番々將

士蠡々農圃登壇受戒、而藤系抑感

065 淚請受戒。大和尚曰、奇哉。今親見興

寺大德。同年二月、藤系薙髮齡二受

沙弥十戒。七十二威儀、名嚴朝。後改號勝

道聖人。終隨律儀受具足戒、通曉法

華經・金光明經・唯識論・天台止觀等

070 數部經論。敬師鑑真大和尚、和友如意

惠雲等。同癸卯季五月五日、鑑真大

和尚入滅壽七十七歲。門弟卒哭涕泣而常有

怵惕之心。如意勝道惠雲等同志而

廟前建碑植菩提樹。同季七月、從南都

075 思詔律師投書於龍興寺。欲東征傳

編集之旨趣也。答以草書一卷當寺之  
日記也。同

年九月二十五日、於當寺境內吉田池勸

諸輪蓋龍王戒壇守護  
之竜神也。天平神護元巳



年九月廿五日勝道西北眺望瑞雲卒  
出寺勝道聖人住竜興寺從天平字  
五年至天平神護元年都五箇年也律師慕  
勝道到字都宮聖人被催衆僧之情濕  
三衣之袂連々別南北累々顧東西聖人  
終入神陀洛山律師則歸寺猶東國貴  
賤登壇受戒輩綿々不絶又弘仁十一  
年五月空海阿闍梨下向當國入竜興  
寺戒壇院室遊覽鑑眞勝跡戒壇靈  
場歡喜尚又於當寺而永置金剛瑜伽  
密教令祈護國除萬民豐樂又唐  
朝將來之兩胎部曼荼羅佛具秘密  
寶器等品々被納置當寺寺務主僧兼  
戒壇院授戒阿闍梨空海登壇爲規模海  
公語如意惠雲等曰當寺始此儀則永  
令無退失吾本意在是依之以海師當  
寺密教弘通之爲元祖然而數輩門葉  
無不修學四度護摩供傳法灌頂等  
之最上乘教眞公者築戒壇勸然開  
律講救世化人海師者傳密教與旨與  
然修金剛密乘鎮護國家云同弘仁  
十一年七月下旬空海和尚同國人二荒山  
此時戒律顯密繁然正嚴重也普  
天卒土乃至沙界除災與樂願者  
法流永令臻龍華三會之曉而已

080 年九月廿五日、勝道西北ノ眺望瑞雲ヲ、卒ニ  
出レテ寺ヲ。勝道聖人住竜興寺、從天平字  
五年至天平神護元年、都五箇年也。律師慕ウテ

勝道ニ到ル字都宮ニ。聖人モ被レテ催セ衆僧ノ之情ニ濕シ  
三衣ノ袂ト連々ト別南北、累々ト顧ル東西ニ。聖人  
終ニ入ル神陀洛山ニ。律師則チ歸寺ニ。猶東國貴  
賤登壇受戒ノ輩綿々トシテ不絶ヘ。又弘仁十一  
年五月、空海阿闍梨下ニ向シ當國ニ、入竜興

085 寺戒壇院ノ室ニ。遊覽鑑眞ノ勝跡ヲ、戒壇ノ靈

場ヲ歡喜シテ、尚又於ニ當寺ニ而永置キ金剛瑜伽  
密教ヲ、令祈護國除災・萬民豐樂ヲ。又唐

朝將來ノ之兩胎部曼荼羅・佛具・秘密

090 寶器等、品々被ナメ置當寺ニ。寺務ノ主僧兼ニルコト

戒壇院授戒阿闍梨ヲ、空海登壇ヲ爲ニ規模ト。海

公語テ如意・惠雲等ニ曰ハク、當寺ニ始メ此ノ儀則ヲ、永  
令無レ退失ト。吾本意在レ是ニ。依レテ之レニ以テ海師ニ當

寺密教弘通ノ之爲ニ元祖ト。然而シテ數輩ノ門葉

095 無レ修學ニ。修學ニ四度護摩供・傳法灌頂等ノ

之最上乘教ヲ。眞公者築キ戒壇ヲ、勸然トシテ開ニ

律講ヲ、救世ヲ、化人ヲ。海師者傳密教ノ與旨ヲ、與

然トシテ修シ金剛密乘ヲ、鎮護國家ニ云。同弘仁

十一年七月下旬、空海和尚同國人二荒山ニ。

100 此時、戒律・顯密繁然トシテ正嚴重ナリ也。普

天卒土、乃至沙界、除災與樂、願クハ者

法流永ク令レト臻ニ龍華三會ノ之曉ニ而已。

天長元甲辰載三月上浣

右當錄起者及數代故舊本至極令破損  
依之今度以往古舊記并令書寫者也  
享保八癸卯年八月吉祥日 見住法印朝覺<sup>造</sup>

慈猛上人行狀記

釋良賢<sup>不知何國人 不詳其生性</sup>早密嚴慈猛上人竜興寺  
中興新義真言法流一派之元祖而顯密二  
教之名德也建歷元辛未年二月十日誕生自幼  
稚時在出塵之志慕佛教來師學法然而嘉  
祿二丙戌稔四月登山門隨隆澄律師而令剃  
髮得度<sup>時歲十六</sup>名空阿受沙弥十戒學惠心流  
者一心三觀窺前開色香中道華一念三千  
座上輝真如實相月示又習檀那流者開  
五時八教大綱明了如來一代法輪舊教觀二  
門耳者性具一如教觀解汲玉泉之流得  
智者源虛終受具足戒<sup>空阿在 山十年</sup>寛元二甲辰年  
入高野山修學瑜伽密教於金剛三昧院受  
傳法灌頂究即身頓悟奧旨<sup>改号慈猛上人 良賢阿闍梨</sup>  
建長七乙卯歲就意教上人而學三寶院流<sup>云</sup>  
云意教上人者。仁王八十五代後堀河院文曆  
二乙未年三月朔日依大將軍賴經公武命而  
龍興寺實主賴賢阿闍梨賜意教上人号

天長元甲辰載三月上浣

右當錄起者、及數代故、舊本至極令破損。  
依之今度以往古舊記再令書寫者也。

享保八癸卯年八月吉祥日 見住法印朝覺<sup>造</sup>

慈猛上人行狀記

- 110 釋良賢<sup>不知何國人 不詳其生性</sup>号密嚴慈猛上人。竜興寺  
中興、新義真言法流一派之元祖ニシテ而顯密二  
教ノ之名德也。建歷元辛未年二月十日ノ誕生ナリ。自幼  
稚時ニ在出塵ノ之志。慕佛教求シテ師學レテ法、然而シテ嘉  
祿二丙戌稔四月、登山門ニ、隨隆澄律師ニ而令剃  
115 髮得度<sup>時歲十六</sup>名空阿ト。受ケテ沙弥十戒、學ニ惠心流  
者、一心三觀ノ窺前ニハ開ケテ色香中道ノ華、一念三千ノ  
床ノ上ニハ耀キ真如實相ノ月、兼又習ニテ檀那流者開ニ  
五時八教ノ大綱、明ニ了シ如來一代ノ法輪、舊レテハ教觀二  
門耳者、性具一如ノ凝ラシ觀解、汲ニ玉泉ノ之流、得ニ  
120 智者ノ源底。終ニ受ニ具足戒<sup>空阿在 山十年</sup>。寛元二甲辰年、  
入リ高野山ニ、修學シ瑜伽ノ密教ヲ、於ニ金剛三昧院ニ受ニ  
傳法灌頂。究ニ即身頓悟ノ奧旨ヲ、<sup>改号慈猛上人 良賢阿闍梨</sup>  
建長七乙卯歲、就意教上人ニ而學ニ三寶院流  
云。意教上人者、仁王八十五代後堀河院文曆  
125 二乙未年三月朔日、依ニ大將軍賴經公武命ニ而  
龍興寺實主賴賢阿闍梨賜ニ意教上人ト号ヲ。



又依 勅命而被任下野講師。尚意教者  
遍智院僧正成賢之爲徒弟故。密家大事・師  
資相承・面授口決等示意教人賴賢<sup>ニ</sup>、爲<sup>シ</sup>玉ヲテ秘  
密相傳正嫡<sup>一</sup>、悉<sup>ク</sup>盡<sup>ス</sup>淵源<sup>一</sup>云。又慈猛人良賢、  
者弘長二壬戌年八月移住下野國大山庄藥師  
寺鄉戒壇院。竜興寺爲<sup>ニ</sup>眞言宗故、上人  
則兼授戒阿闍梨<sup>一</sup>。<sup>是則依</sup>同三年、在藥師寺  
五郎政村<sup>仁</sup>來。竜興寺而拜戒壇受戒。  
此時貴賤之緇素群集<sup>一</sup>。文永五戊辰年二  
月、足利庄小俣鄉鷄足寺之學頭一乘坊賴  
尊法師詣竜興寺長老慈猛法室而登  
壇受戒。<sup>賴尊法師印又予備前僧都寄。竜興寺之師學教  
檀傳。鷄足寺同六已年密嚴上人慈猛和尚顧</sup>  
戒壇縁起<sup>一</sup>。自天長年中至文永  
六年、凡及四百四十余年。患<sup>ニ</sup>其放失遂書宗  
再<sup>ニ</sup>補之<sup>一</sup>。蓋<sup>シ</sup>夫慈猛上人住戒壇院竜興寺  
已十有餘年。東國諸山之群賢來<sup>ニ</sup>竜興寺<sup>一</sup>、受  
沙弥十戒及比丘戒或律學等<sup>一</sup>。兼而汲<sup>ニ</sup>三密五  
智之瓶水<sup>一</sup>、灌<sup>ニ</sup>三毒五濁之頂<sup>一</sup>。最碩德三十有八  
口餘。<sup>賴尊・賴慶・永仙</sup>此時專顯密・戒律盛<sup>ニ</sup>而、戒  
壇院竜興寺爲<sup>ニ</sup>中興開山之哲祖<sup>一</sup>也。頗建治  
元乙亥年四月移住足利鷄足寺。又受意教上  
人指授撰<sup>ニ</sup>十八道口決<sup>一</sup>。<sup>是口決中瀧水之時散枝置瀧水  
器上、先杖水共加持之、然而後令加持。  
諸供物等云云。心覺阿闍梨抄有此規則。他流無是口決。是即  
當寺別流一箇之秘傳也。</sup>  
尚亦密宗口決顯數十卷<sup>一</sup>。<sup>兩界註尺人  
護摩難抄等也</sup>同三年

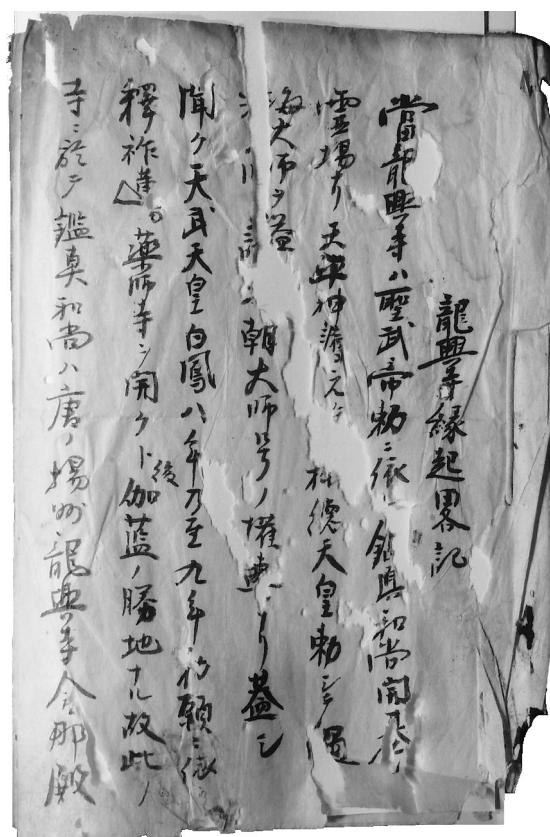
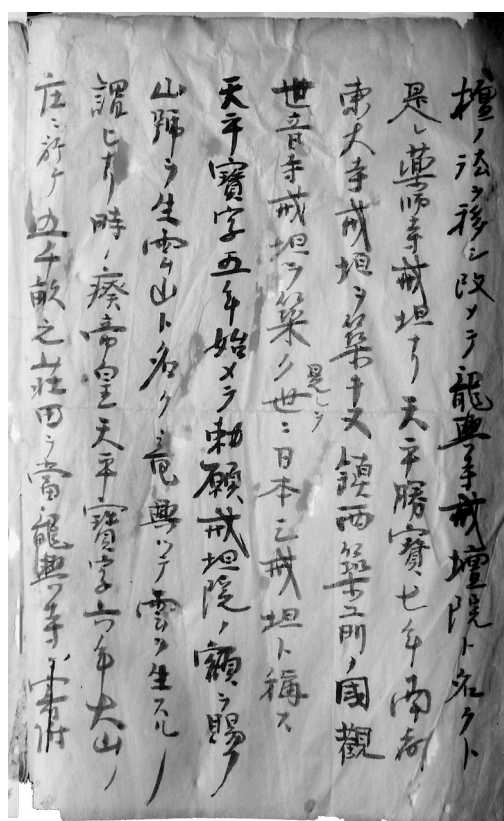
- 又依<sup>ニ</sup>勅命<sup>一</sup>而被<sup>レ</sup>任<sup>セ</sup>下野ノ講師<sup>ニ</sup>。尚意教者、  
遍智院僧正成賢之爲<sup>ニ</sup>徒弟<sup>一</sup>故、密家大事・師  
資相承・面授口決等示<sup>ニ</sup>意教<sup>一</sup>人賴賢<sup>ニ</sup>、爲<sup>シ</sup>玉ヲテ秘  
密相傳正嫡<sup>一</sup>、悉<sup>ク</sup>盡<sup>ス</sup>淵源<sup>一</sup>云。又慈猛人良賢、  
者弘長二壬戌年八月、移<sup>ニ</sup>住<sup>一</sup>下野國大山庄藥師  
寺鄉戒壇院<sup>ニ</sup>。竜興寺爲<sup>ニ</sup>眞言宗故、上人  
則兼授戒阿闍梨<sup>一</sup>。<sup>是則依</sup>同三年、在藥師寺  
五郎政村<sup>仁</sup>來。竜興寺<sup>ニ</sup>而拜<sup>ニ</sup>戒壇<sup>一</sup>受戒<sup>ス</sup>。  
此時貴賤之緇素群集<sup>一</sup>。文永五戊辰年二  
月、足利庄小俣鄉鷄足寺之學頭一乘坊賴  
尊法師、詣<sup>ニ</sup>竜興寺長老慈猛<sup>一</sup>法室<sup>ニ</sup>而登  
壇受戒。<sup>賴尊法師印又予備前僧都。寄竜興寺ノ勸學校、  
檀傳。鷄足寺同六已年、密嚴上人慈猛和尚顧</sup>  
歸<sup>ニ</sup>住<sup>一</sup>鷄足寺<sup>ニ</sup>。同六已年、密嚴上人慈猛和尚顧<sup>ニ</sup>  
戒壇縁起<sup>一</sup>。自天長年中至文永  
六年、凡及四百四十余年。患<sup>ニ</sup>其放失<sup>一</sup>、遂書<sup>シ</sup>、  
再<sup>ニ</sup>補<sup>一</sup>之<sup>一</sup>。蓋<sup>シ</sup>夫慈猛上人住<sup>ニ</sup>戒壇院竜興寺<sup>一</sup>  
已十有餘年。東國諸山之群賢來<sup>ニ</sup>竜興寺<sup>一</sup>、受  
沙弥十戒及比丘戒、或律學等<sup>一</sup>。兼而汲<sup>ニ</sup>三密五  
智之瓶水<sup>一</sup>、灌<sup>ニ</sup>三毒五濁之頂<sup>一</sup>。最碩德三十有八  
口餘。<sup>賴尊・賴慶・永仙</sup>此時專顯密・戒律盛<sup>ニ</sup>而、戒  
壇院竜興寺爲<sup>ニ</sup>中興開山之哲祖<sup>一</sup>也。頗建治  
元乙亥年四月、移<sup>ニ</sup>住<sup>一</sup>足利鷄足寺<sup>ニ</sup>。又受意教上  
人指授、撰<sup>ニ</sup>十八道口決<sup>一</sup>。<sup>是口決中瀧水之時散枝置瀧水  
器上、先杖水共加持之、然而後令加持。  
諸供物等云云。心覺阿闍梨抄有此規則。他流無是口決。是即  
當寺別流一箇之秘傳也。</sup>  
尚亦密宗口決顯<sup>ニ</sup>數十卷<sup>一</sup>。<sup>兩界註尺人  
護摩難抄等也</sup>同三年

丁丑四月二十一日上人入滅。壽六十七歲。号ニ藥師寺慈  
猛人・戒壇院主良賢大阿闍梨ト。蓋シ夫壯年ノ之時  
入<sub>リテ</sub>台門者受<sub>ニ</sub>高祖太師ノ傳<sub>一</sub>、學<sub>ニ</sub>密乘<sub>一</sub>者汲<sub>ニ</sub>  
傳燈ノ法流<sub>一</sub>。猶更令<sub>ニ</sub>戒壇中興<sub>一</sub>、開<sub>ニ</sub>鷄足<sub>一</sub>、化<sub>ニ</sub>貴  
賤<sub>一</sub>。註抄ノ纂述者爲<sub>ニ</sub>學者ノ賞翫<sub>一</sub>。得<sub>レ</sub>名<sub>ニ</sub>說法<sub>一</sub>、  
振<sub>ニ</sub>智辨<sub>一</sub>、度<sub>ニ</sub>萬機<sub>一</sub>。雜談集卷之第四丁ニ曰、下野州  
藥師寺長老密嚴故上人慈猛  
者天台・東寺兩流眞言顯密學生、說戒之名人。云云。右雜談集  
無住和尚作。砂石集、同作之事也。彼之書具、說法行德、註セリ。  
呼噫雖<sub>トモ</sub>成<sub>ニ</sub>道德<sub>一</sub>所<sub>ト</sub>、道自不<sub>レ</sub>弘人能<sub>ク</sub>弘<sub>ニ</sub>道<sub>一</sub>。蓋シ夫教  
法興隆唯<sub>ハ</sub>在其人<sub>ニ</sub>云。慈猛密嚴上人者夫<sub>レ</sub>開  
祖眞公乘<sub>ニ</sub>願力<sub>一</sub>而再來者歟。其ノ化益潤然<sub>トシテ</sub>  
玄廣<sub>ナルコト</sub>耶。

右當緣起並慈猛行狀記共筆記之事、現  
住法印阿闍梨朝覺与野院因緣有之。依懇  
望而無所辭、以一蓮詫生之志、乍簞筆謹令  
書寫者也。  
山門東塔沙門權大僧都堅者法印全照玄空  
享保十乙巳載霜月二十四日

- 丁丑四月二十一日、上人入滅。壽六十七歲。号ニ藥師寺慈  
猛人・戒壇院主良賢大阿闍梨ト。蓋シ夫壯年ノ之時  
入<sub>リテ</sub>台門者受<sub>ニ</sub>高祖太師ノ傳<sub>一</sub>、學<sub>ニ</sub>密乘<sub>一</sub>者汲<sub>ニ</sub>  
傳燈ノ法流<sub>一</sub>。猶更令<sub>ニ</sub>戒壇中興<sub>一</sub>、開<sub>ニ</sub>鷄足<sub>一</sub>、化<sub>ニ</sub>貴  
賤<sub>一</sub>。註抄ノ纂述者爲<sub>ニ</sub>學者ノ賞翫<sub>一</sub>。得<sub>レ</sub>名<sub>ニ</sub>說法<sub>一</sub>、  
振<sub>ニ</sub>智辨<sub>一</sub>、度<sub>ニ</sub>萬機<sub>一</sub>。雜談集卷之第四丁ニ曰、下野州  
藥師寺長老密嚴故上人慈猛  
者天台・東寺兩流眞言顯密學生、說戒之名人。云云。右雜談集  
無住和尚作。砂石集、同作之事也。彼之書具、說法行德、註セリ。  
呼噫雖<sub>トモ</sub>成<sub>ニ</sub>道德<sub>一</sub>所<sub>ト</sub>、道自不<sub>レ</sub>弘人能<sub>ク</sub>弘<sub>ニ</sub>道<sub>一</sub>。蓋シ夫教  
法興隆唯<sub>ハ</sub>在其人<sub>ニ</sub>云。慈猛密嚴上人者夫<sub>レ</sub>開  
祖眞公乘<sub>ニ</sub>願力<sub>一</sub>而再來者歟。其ノ化益潤然<sub>トシテ</sub>  
玄廣<sub>ナルコト</sub>耶。

- 165 右當緣起並慈猛行狀記共筆記之事、現  
住法印阿闍梨朝覺与野院因緣有之。依懇  
望而無所辭、以一蓮詫生之志、乍簞筆謹令  
書寫者也。  
山門東塔沙門權大僧都堅者法印全照玄空  
「花押」  
享保十乙巳載霜月二十四日



【翻刻Ⅱ】

龍興寺縁起畧記

當龍興寺ハ、聖武帝勅ニ依テ鑑真和尚開基ノ  
靈場ナリ。天平神護元年、稱徳天皇勅シテ過  
海大師ヲ諡□。本朝大師号ノ權輿ナリ。蓋シ  
聞ク、天武天皇白鳳八年乃至九年、勅願ニ依  
釋祚連藥師寺ヲ開クト。後、伽藍ノ勝地ナル故、此ノ  
寺ニ於テ、鑑真和尚ハ唐ノ揚州龍興寺舍那殿

一〇

壇ノ法ヲ移シ、改メテ龍興寺戒壇院ト名クト。  
是レ藥師寺戒壇ナリ。天平勝寶七年、南都  
東大寺戒壇ヲ築キヌ。鎮西築前ノ國觀  
世音寺戒壇ヲ築ク。是レヲ世ニ日本三戒壇ト稱ス。  
天平寶字五年、始メテ勅願戒壇院ノ額ヲ賜フ。  
山號ヲ生雲山ト名ク。竜興ツテ雲ヲ生スルノ  
謂ヒナリ。時ノ癸帝皇天平寶字六年、大山ノ  
庄ニ於テ五千畝之莊田ヲ當龍興寺ニ寄附

一〇



キレ永ク法務ノ領地トス  
日光開山勝道上人ハ藤系ヲ興<sup>ミ</sup>キトシテ鑑真  
和尚ノ明徳ヲ聞キ、竜興寺ニ来リ、戒坦ヲ拝シ  
受戒ヲ請フ。藤系二十七才ニシテ薙髮セラル。天平  
神護元年、竜興寺ヲ出テ、補陀格山ニ  
入ルト。今ノ日光山是レナリ。弘仁十一年五月  
空海阿闍梨（弘法大師）竜興寺戒坦院ヲ拝シ、  
鑑真和尚ノ勝跡ヲ祥覽シ、戒坦靈場ヲ歎

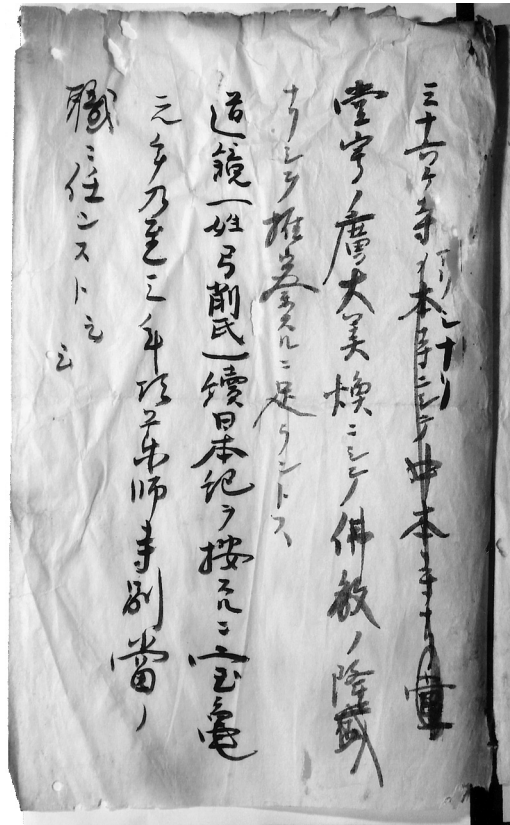
セラル、永ク法務ノ領地トス。  
日光開山勝道上人ハ藤系、字興寺ト云フ。鑑真  
和尚ノ明徳ヲ聞キ、竜興寺ニ来リ、戒坦ヲ拝シ、  
受戒ヲ請フ。藤系二十七才ニシテ薙髮セラル。天平  
神護元年、竜興寺ヲ出テ、補陀格山ニ  
入ルト。今ノ日光山是レナリ。又、弘仁十一年五月、  
空海阿闍梨（弘法大師）竜興寺戒坦院ヲ拝シ、  
鑑真和尚ノ勝跡ヲ祥覽シ、戒坦靈場ヲ歎

2オ

喜シ玉ヒ護國除災萬民豐樂ノ為メ御修法シ玉フ。  
弘仁十一年七月、空海阿闍梨ハ二荒山ニ入り、  
此ノ時戒律顯密繁然正嚴重ナリ。  
當寺中興開山慈猛上人、顯密二教ノ奧秘  
ヲ究メ、新義眞言宗諸派一派持明派流ノ元祖ナリ。  
次ニ藥師寺五郎政村ト云御仁ハ、竜興寺戒坦ヲ  
拝シ受戒スト。當竜興寺ハ中本寺ニシテ、末寺

喜シ玉ヒ、護國除災<sup>災</sup>萬民豐樂ノ為メニ御修法シ玉フ。  
弘仁十一年七月、空海阿闍梨ハ二荒山ニ入り、  
此ノ時戒律顯密繁然、正嚴重ナリ。  
當寺中興開山慈猛上人ハ顯密二教ノ奧秘  
ヲ究メ、新義眞言宗諸派一派持明派流ノ元祖ナリ。  
次ニ藥師寺五郎政村ト云御仁ハ、竜興寺戒坦ヲ  
拝シ受戒スト。當竜興寺ハ中本寺ニシテ、末寺

2ウ



三十六ヶ寺ノ本寺<sup>アリシナリ</sup>ニシテ中本寺ナリ。堂  
 堂宇ノ廣大美煥ニシテ、佛教ノ隆盛  
 ナリシヲ推察スルニ足ラントス。  
 道鏡（姓弓削氏）、續日本紀ヲ按スルニ、宝龜  
 元年乃至三年頃、藥師寺別當ノ  
 職ニ任ンスト云。

「  
3オ

（裏表紙）「  
3ウ

（せきぐち しずお 歴史文化学科）  
 （まつもと まみ 生活機構学専攻客員研究員）